

コース・デザインにおける「時間的余裕」と「他者」の意義 —ある上級日本語学習者へのインタビュー・データから—

小澤伊久美

国際基督教大学日本語教育課程

This paper aims to discuss the importance of “time” and “others” in course designing using data from an interview with an advanced learner of Japanese. First, this paper introduces the interview, which focuses on what the learner thinks after reading an article in a Japanese language textbook. Then, it points out that when the learner is given enough time to consider, one can come up with deep thought generated from deliberation with one’s past experience and information from the article, even though the content of the article is very simple. It also points out that contact with others, including teachers, help the learner deepen one’s ideas. Finally, it discusses how these findings should be applied to designing a language course.

1. はじめに

筆者は、日本語学習者が読解教材に接した際にどのようなことを感じるのかについて学習者個人に着目して分析するという共同研究に携わっている（丸山 2007a、2007b、丸山・小澤 2007）。そこでは、学習者と教材のインタラクションの解明のための研究手法として、信頼性の高い質的調査の手法である個人別態度構造(PAC: Personal Attitude Construct) 分析法を用いているが、その調査で実施した日本語学習者に対するインタビュー・データからは、当該の研究目的についてだけではなく、日本語教育のコース・デザインにおいて「時間的余裕」や「他者」の果たす役割の大きさが浮かび上がった。

これまでに筆者らが共同研究で実施した PAC 分析調査は4つあるが、そのうちの1つは筆者の手続きの誤りで PAC 分析のデータとして分析するのに不適当なものとなってしまった。しかし、インタビュー・データそのものは上述の気づきを数多く調査者にもたらすものであった。

そこで本稿では、この PAC 分析から外したデータを基に、クラス活動において内容について十分考えを深める時間的な余裕が学習者に与えられることの意義と、教師を含めた他者との接触の意義について論じたい。

そして、そのような「時間的余裕」や「他者」との接触がもたらす意義を十分考

慮したコース・デザインをすることは、国際基督教大学(ICU)のように諸学問の基盤、また次世代を担っていく大学生が身に付けるべき基盤であるリベラル・アーツの一環として言語教育を位置づけている場合に、その言語教育の本質に関わる特に重要な観点であるということを指摘する。

2. 調査の概要

前述のように、本稿で示すデータは、日本語学習者が読解教材に接した際に感じることにについて学習者個人に着目して分析することを目的とした PAC 分析調査の一つとなされたものであり、通常のインタビューとは異なる手続きを取っている。

具体的には、学習者に読解教材を読んだ時のイメージを自由連想によってあげてもらい、学習者が感じている個々のイメージの類似度をクラスター分析にかけて析出したデンドログラム(樹状図)を見ながらインタビューを行った。インタビュー内容はクラスターのまとまりやそれが持つイメージについて尋ねたもので、全体に学習者が自由に語り、筆者はその発話のきっかけとなるイメージがよりよく喚起できるように捕捉したり刺激を与えたりすることに徹している。

筆者の手続き上の誤りから本データは PAC 分析のデータとは言えないものになったが、本稿の議論にはこのインタビューの方法そのものが大きく関与しているため、本節では本調査が取った PAC 分析の手続きについて少し紙面を割いて説明したい。

2.1. 調査協力者

調査協力者(以下、協力者)は、アジア地域からの4年間の留学生(男子学生)で、専攻は経済学である。大学入学までの教育は、母国を離れて全寮制の学校に入るなどして全て英語で受けており、母語は英語である。

日本語学習歴は、大学に入ってから3年間(8学期間)のみで、その間に週に10時間のコースを5学期間と、週に20時間の集中コースを2学期間取って初級から中級のレベルを修了しており¹、調査実施時期には週に2-3時間が1つの科目となっている上級レベルのコースのうち「読解」「話し方」「聴解」の3種類を組み合わせ履修していた。日本語力は総合力としては上級レベルであるが、4技能のうち、口頭運用力が他と比べて高く、読み書きの力との差がやや開いている。

日本での留学体験がある父親の仕事の関係で、来日前から日本人や日本との接点がある。また、2歳のころに家族旅行で1ヶ月間日本に滞在したことがある。大学入学後は学内の寮に日本人学生と共に居住している。

2.2. 調査の手続き

調査は2006年1月24日に、筆者の研究室において筆者自身が実施した。調査時間は約3時間であるが、そのうちインタビューの部分(下記の(g)と(h)の部分に該当する)は1時間であった。筆者は、ICUの学部生を対象とする日本語教育に従事し

「時間的余裕」と「他者」の意義

ており、協力者についても中級入り口のレベルで授業を担当して以来、交流があり、リラックスしてインタビューを受けられる信頼関係が形成されている。

調査の手順は以下の通りである。

(a) テキストを与える

日本語の教科書に掲載されている下記の読み物を読んでもらう。テキストの日本語のレベルは中級前半で、辞書が必要だと思われるものについては簡単な語彙リストが付されているので、協力者の日本語運用力で容易に読めるⁱⁱ。

ベティが日本に留学してびっくりしたことの一つは、日本人のブランド志向だった。日本へ行く時、ホストファミリーに何かおみやげをもっていった方がいいと思い、お父さんにはネクタイ、お母さんにはハンドバッグ、子供たちにはアメリカの大学のTシャツを買っていった。お父さんと子供たちは喜んでくれたが、お母さんはあまり嬉しそうな顔をしなかった。そのハンドバッグは、故郷の町のアート・フェアで買った手作りのバッグで、けっこう高い物だったから、ベティーはがっかりしてしまった。あとで、お母さんの持っているバッグは全部ブランド物ばかりだということに気づいた。バッグだけでなく、ブラウスやベルトやソックスもブランド物ばかりなのだ。その上、トイレのスリッパまでピエール・カルダンの名の入ったブランド物なので、ベティーはトイレに入るたびにおかしくて笑ってしまった。

出典：三浦・マグローイン「速読 ブランド志向」『中級の日本語』ジャパン・タイムズ(1994), p. 181

(b) 連想刺激文を与える

協力者に与えた連想刺激文ⁱⁱⁱは「これは外国人のための日本語の教科書です。あなたはこの文章に書かれている日本について、どう感じましたか。あなたの感じたことを、言葉やイメージで表してください。書く時には思いついた順に、順位の番号をつけてください。」である。この連想刺激文は、紙面で渡すと同時に口頭でも与える。

(c) 思いつくままに連想したことばを1語ずつ1枚のカードに書いてもらう

用意したカード10枚に、思いついた順に1枚に1語ずつ書いてもらう。

(d) カードを重要な順に並べてもらう

想起順になっている(c)のカードを、重要度順に1から10までに並べ替えてもらい、重要度順を数字で記入する。

(e) カードの組み合わせのイメージの近さを直感的に7段階で評価してもらう

(d)で並び替えたカードを2枚ずつ見て、各ペアがどの程度類似しているかについて、「非常に近い(1)」から「非常に遠い(7)」までの7段階で直感的なイメージで評価してもらう。評価は、カードの全ての組み合わせについて行う。

(f) デンドログラム（樹状図）の作成

協力者には休憩を取ってもらい（休憩中にフェイスシートへの記入を依頼した）、その間に、調査者は (e) の情報（連想項目間の類似度距離行列）をコンピュータの統計ソフト¹⁴に入力し、ウォード (Ward) 法によるクラスター (Cluster) 分析を実施して、デンドログラム（樹状図）を析出する。

クラスター分析とは、似ている対象を自動的に集めて分類する手法である（小西 2007）。クラスター分析では対象間の近さを距離として計算して距離の近いものをクラスターにまとめていくが、最も距離の近い2つのクラスターを逐次併合し、最終的に全ての対象が1つのクラスターになるまで併合し続けることで、階層構造を析出する。その階層構造を図で表したのがデンドログラムである（本インタビュー調査で作成したデンドログラムを図1にあげたので参照のこと）。

なお、クラスター間の距離算出法は複数あり、筆者が適用したウォード法はクラスター内のデータの二乗の総和を最小化する方法で（神畷 2003）、最も明確なクラスターを作ると言われており、PAC 分析開発者の内藤もこれまでの PAC 分析で有効であったとしてウォード法の使用を勧めている（内藤 2002）。

(g) デンドログラムに基づいたインタビューを実施する

協力者にデンドログラムを見ながらインタビューに答えてもらう。具体的には、デンドログラムを見せて、まとまりを持つクラスターとして解釈できそうなグループを協力者に提示してもらい、まとまりだと思ふ理由やクラスター間の関係、各項目のイメージなどを質問に答える形で説明してもらう。筆者からの質問は、協力者の中のイメージや感覚、感情を自由に感じさせ、自由な回答を可能にするオープンクエスチョンを原則とする。また、内藤（2002：48-51）に従い、質問することよりも、協力者にとってのイメージを共に感じ、イメージの流れに寄り添う同行者として、傾聴する姿勢を保つように心がけた。

(h) 各連想項目のイメージ（プラスかマイナスか）を評価してもらう

各連想項目の単独のイメージが直感的にプラス（+）、マイナス（-）、どちらともいえない（0）のいずれに該当するかを答えてもらう。

なお、調査は協力者の許可を得て MD に録音した。使用言語は、本来は協力者が思っていることが自由に表現できるよう母語で行うことが適切であるとされている¹⁵が、今回は本人との相談の結果、日本語で行い、表現が不十分であると協力者が判断したときに適宜母語（英語）を使用するという形式をとった。

今回筆者が手続きを誤ったのは、(g) である。デンドログラムを提示する際に、デンドログラムの隣に (c) で協力者が書いた連想語を書き込んで示すのであるが、デンドログラム作成時には重要度順で入力しており、デンドログラムの中にある数字も重要度順であるのに、筆者は連想順につけた番号を用いて連想語を並べてしまった

のである。従ってデンドログラムの個々の項目が意味する連想語が協力者に間違っ
て提示されたことになる。結果として、協力者に提示されたデータは連想語の類似
度を基にどのような認知構造があるかを考えるには不適當で、それに基づいたこの
インタビューは PAC 分析データとしては意味のないものになってしまったのである^{vi}。

3. データの解釈と考察

3.1. デンドログラムと連想語

協力者のデンドログラムは図 1 の通りである。図中の数字は連想語の重要度順の
番号を表している。この協力者の連想語は、語というよりも文章となっていて長い
ため、図の下に番号をつけて掲載する。なお、連想語は本来重要度順番号で並べて
あるべきところだが、前述のように想起順の番号によって並んでしまっている。本
稿は、このデンドログラムが何を示しているのかではなく、協力者が何を語ったか
に着目するものであり、それを理解するためには何を見て話していたかという資料
がある方がよいという観点からこのデンドログラムを提示することにした。従って、
誤って本来とは異なる番号や並べ方で記載された連想語の場所を基に戻すことはせ
ずに、協力者が見ていたのと全く同じ形でデンドログラムを示すことにする。

連想語のプラス・マイナスのイメージは、10 項目のうちプラス項目が 4 項目、マ
イナス項目が 6 項目、0（どちらでもない）項目が 0 項目で、全体的には提示された
文章に書かれている日本についてのイメージはマイナスがやや強いと言える。

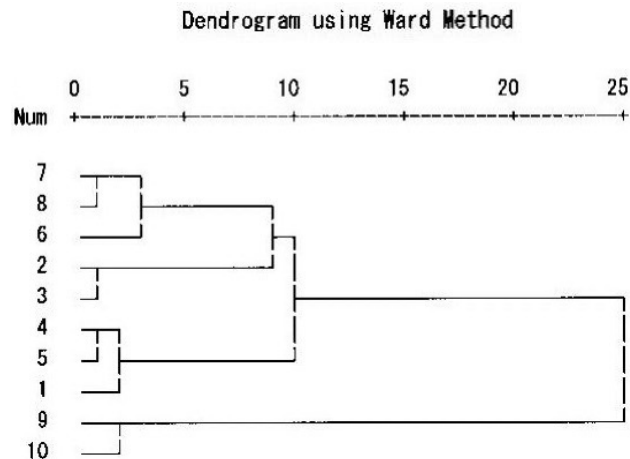


図 1 協力者のデンドログラム

<協力者のあげた連想語>

COMMENT 7 (-) Japanese people are very shy or hesitant in showing their gratitude
to foreigners.

COMMENT 8 (-) Japan is surrounded by a technological factor which makes their life
or feelings very systematic or unreal.

「時間的余裕」と「他者」の意義

- COMMENT 6 (+) Japanese people do not believe in giving or taking rather be patient and understand each other's feelings.
- COMMENT 2 (-) Japanese people believe in the purity of their own things or not any goods from a foreign country. In other words, they prefer things that fit their choices or taste.
- COMMENT 3 (-) High standard of living.
- COMMENT 4 (-) Japan follows what every other country does. for e.g. fashion, business. They like to possess things just for the sake of having it or not for its utility.
- COMMENT 5 (+) Japan is a very narrow but yet a sophisticated society.
- COMMENT 1 (+) 日本人のきたいはかなりたかいだと思います。
- COMMENT 9 (+) Japanese people are at times unsocial yet when get to know them better, they are just like one of your friends.
- COMMENT 10 (-) Japan is a country lost in its own culture and shows little sign to be a part of the global culture.

筆者は協力者に、まず、上の図を見て、全体をいくつかのクラスターに分け、その後でコメントの文言を読んで、各クラスターに名前をつけるように求めた。協力者は全体を3つのクラスターに分け、クラスターの1は comment7 から comment6 までの3つで、「文化の違い」という名前をつけた。クラスターの2は comment2 と 3, そして少し飛んで comment10 を入れた3つで、“Clash of era”, “Difference of era” 「昔の日本と今の日本」という名前をつけた。クラスターの3は comment4 から 9 までの4つで、「日本社会」という名前をつけた。次にクラスターを構成する個々の項目について、クラスター間の関係についてインタビューが進み、インタビューが終わりに近づいたところにデンドログラム全体をまとめる名前を尋ねられた協力者は “Illusion or delusion”, “Illusion or hope” という名前をあげている。

3.2. インタビュー・データ

PAC 分析におけるデンドログラムに基づくインタビューは、個々のクラスターについて、各クラスターの関係（今回の協力者の場合は上述の通りクラスターが3つとなったので1と2、2と3、3と1の3つ）、そしてクラスター全体、補足質問についてというまとまりがある。筆者はクラスターの名前をつけるように尋ねたり、クラスターで思い浮かぶ色や形などを聞いたり、各クラスターの相違を尋ねたり理由を尋ねたりしながら、協力者が自分自身で解釈を深める手助けをしている。

本節では末田（2001）、内藤（2005）と同様に、協力者の発話内容を可能な限りそのまま掲載する（意味の誤解を招くような文法上の誤りは修正した）。「」内は調査手順（c）で協力者がカードに書き込んだ内容で、（）内は協力者の発話内

「時間的余裕」と「他者」の意義

容を理解するために必要だと思われる補足情報を筆者が加筆した部分である^{vii}。

(クラスター1を構成する個々の連想語の意味を確認した後で。)

0064A：(中略) こういう(クラスター1にまとめられたような) 考えて日本に来たときにすぐにはと思ったの？前からだったの？

0065B：いや、これは経験で。

0066A：経験があるんですか。たとえばこのコメントの7番どんな経験があるの？

0067B：うーん。7番は、えーとですね、「Japanese people are very shy or hesitant in showing their gratitude to foreigners.」そうですね、たとえば、えーと寮で大会があって、で大会がから優勝したんですよ。で、僕はそのときキャプテンだったけど、その前のキャプテンのときは日本人なんです。で、彼のためいろいろギフト買ったりとか、飲み会があったり。で、僕ときはあんまりまあ、そういう飲み会とかあったけど、あんまり僕はまあがんばったよりとか、あの思ったより、その逆にあのーなんか感謝してもらえなかったんですよ。自分ががんばって、だから

(中略)

0073B：(中略) あとですね、いつだっけ渋谷に行ったとき普通に歩いて、で、おじいさんおばあさんぐらいたか、あと若者とか道迷って、あ、駅どこですかって言ったら、もうありがとうも言わないでずーっと

(中略)

0077B：あとレストランとかいくときも、みんなあのあれ言うんじゃないですか、普通に帰って、あのお気をつけて帰ってくださいとか、どうもありがとうございましたとか、でレシートはこっちでそのまま。

0078A：あー、じゃそれは自分が外国人だからかなーって思ってる。

0079B：いや、それは外国人じゃなくて普通に日本、あの方の考え方とか、お客さんのためにとかそういう考え方。もちろん、あの、日本人も入ってますけど。

この発話記録を見てもわかるように、協力者があげた連想語は寮での生活を初めとした協力者自身の非常に個人的な体験に裏打ちされて出てきたものである。後で言及するように、この傾向はインタビュー全体を通して観察される。

上に引用した個所で興味深いのは、連想語を書いた時点では「日本人は外国人に対して・・・」という括りで考えていたのに対し、インタビューでその背景にある体験などを交えて意見を述べているうちに、0079Bに見られるような「外国人に対する態度」とは限らず、対象には「日本人も入っ」た態度なのだと見解が変わっている点である。他者に対して説明を試みるうちに思考を深化させた例だと言えよう。

協力者が大学内であるいは大学を越えた交友関係の中で、または遊んだり飲んだりした街での個人的体験から得られた感想や意見は、その他のコメントについての発話にも表れている。例としてコメントの6番と9番についての発話をあげる。

「時間的余裕」と「他者」の意義

0097B: 6 番は、えー、「Japanese people do not believe in giving or taking rather be patient or understand…」あー、実はですね、この、僕はもう 2 年ぐらい教えている家族があのですよ。で、すごい仲良くで、で自分のお母さんとお父さんみたいな関係ですよ。で、あの、ま、この前お土産をあげたんですよ。あんまり、やっぱ、そんなにあんま、逆にあのお母さんとお父さんからありがとうっていう、あんまり感じしなかったんですよ。

0098A: そう。

0099B: 普通に、あ、お土産みたいな。

0100A: あ、ほんと。

0101B: ですが、ま、そういうよりも、で、国に、いつだっけ 2, 3ヶ月前ぐらい、あの、家族がその家族が僕にクリスマスの前ぐらい家に誘って、で、みんなで食事にしたんですよ。で、そっちのほうがかもつとすごく、あの、すごく家族のあったかさを感じ、感じましたんですよ。だから、やっぱあの、金がかかっ、あの、お金を使ってなんか買ってあげるのなんかそうそれだけは everything じゃないですね。やっぱ自分の気持ちとかもつと仲良くしていろんな方法はあるんですよ。だから、話をしたりとか。Discussion をしたりとか、もつといい時間を一緒にすごしたりとか。そっちのほうがあ僕この 2 年ぐらいでそういうやってたから、あのその家族と仲良くするのはあの成功したんですよ。

0167B: (中略) これ (コメントの 9 番) はたぶん一番大きな経験ですよ。今まで。ま、あ、僕はあのその人間関係などは大事にするので、よく友だちとか昔ね、あの、昔というか、2, 3年前日本人友だちとかいな、なかったんですよ。で、僕はあのすごい音楽が好き、好きで、あの、あのクラブとかいくんですよ。で、そのクラブは遊びにじゃなくて普通にあのヨーロッパのほうから、あの来てるんです、あの有名な人とか、で、あの人の show とか見に行くんです。で、あー、普通にあの、クラブに行って、ちょっと話とかするんじゃないですか。ちょっとお酒軽く飲んで。で、あの時は、ま、はなする、話しかける人もいるけど、もうぜんぜん無視する人もいるし、だけど、あー、ひとつの経験は、あの、そのクラブの中で働いてる人ですよ。で、1 回 2 回 3, 3 回ぐらいあその人から無視されて、で 5 回 6 回ぐらい、まあちゃんと話をして、で、またもう 1 年ぐらいもう終わったんですよ。で、前は、あの、もちろん連絡とかとったんですよ。だけど、前は向こうから電話なかった、

0168A: あー、そう。

0169B: いつも僕からかけての、今は毎週毎週ぐらい、あー、ちょっと遊びに来てください。ま、それは、お客さんの、あれ、ビジネスみたいけど、ま、たぶんちょっとあの、人間関係があると思いますけど。

0170A: ふーん。

0171B: で、あの、ま、これじゃなくて自分の private あの private life ときも例えば

「時間的余裕」と「他者」の意義

サッカーしたりとかね、あの、最初サッカー部入ったとき、ま、すごい人が冷たくしてね、あの飲み会行っても、飲み会とか行ったときも誰も話しかけないとか、あった、ありますよね。で、あと、まあ、そうですね、これは一番、あの大きな経験は、まあ友だちと遊ぶって言うことですよ。

0172A：うんうんうん。

0173B：ま、遊ぶはほんとは普通の遊ぶじゃくて、別に学校であの食堂でいっしょに食べたりとか、スポーツしたりとか、ま、寮でなんかイベントに参加したりとかするんですよ。それは、まあ、だからだけど、もうすごい、ちょっとあの相手に気持ちをよく分かってきたら、ま、彼も、あ、この人が僕のことよくあの考えていますとか、と、僕のことよく気をつけてますとか、ちゃんと朝でてきたら挨拶したりとか、と思ったから、ま、日本人はちょっと sensitive みたいんですよ。

0174A：あー、そうですか。

0175B：その sensitive 人と会うのすごい難しい経験ですよ。だから、その、自分もその sensitive 人のためになんかやらないと、向こうから全然アプローチしないんですよ。男も女性も同じですよ。

0176A：あー、そう。年もあまり関係ない？

0177B：はい。年もあまり関係ない。

0178A：あー、そうですか。

0179B：ま、年上の方がもっとこれの、このことすごいよくわか、わかりますから、他の年上の人とか

0180A：よく分かるっていうのは？こういうことをよくするという意味？

0181B：いや、しないです。しない。

0182A：あー、しない。この人たちはこれがよく分かっているからあまりしない。

0183B：はい、はい。

このような個々の体験に裏打ちされて、協力者の中には、ある日本像ができ上がっており、その日本あるいは日本人に対する協力者の論評や要求といったものが読み物を読んで連想されたことがインタビューではよりはっきりと見えてくる。例えば、協力者は、ルイ・ヴィトン話から、ファッション・スタイルの真似という現象に言及し、自分のスタイルやパーソナリティをアピールするために日本人はもっと“be self dependent”であるべきで、「自分の国内であるものをそれを使ったらもっといい」「そうすると、あの、性格もすごい強く見えるし、やっぱり、あの、自分が他の人の前に、あ、わたしはこの人です、っていうすぐ見える」「そしたら日本人ももっと友だちとか作ったりとか、もっと社会的に、あの、まあなれるんじゃないと思います。」と述べている。

連想語を見てもわかるように、インタビューでは読み物に書かれた内容について直接言及するよりも、このように、一見それとは関係のなさそうな、日本について

「時間的余裕」と「他者」の意義

協力者の持っているイメージが話題の中心となっている。この協力者の日本に対するイメージは、今の日本に対して少し否定的であるものの、クラスターに色のイメージをつけるよう言われて、「クラスター2は朝日」という言葉をあげ、その理由として「なぜか言うと、えーと、まだチャンスありますよ。」「まだ実は、beginning of a day. まだ昼じゃないから、まだ朝ですよ。」「まだ、you know, まだ、まだ夜じゃないですからだいじょぶっていう意味。な、なんか、なんかやったらできる。」とあげたことにも象徴されているように、日本にはまだ将来にそれを乗り越えるだけの希望があるとも考えているようだ。

そのような考えはクラスター2に限らず全体に共通して見られ、続けて次のクラスターの構成要素であるコメントの10番について尋ねた時にもかなり長い次のような発話がなされている。

0240B: で、あと10番は「Japan is a country lost in its own culture or shows little sign to be a part of the global culture.」で、あのこういう、あー、ま、この2番と、ま、いろんなものがあって、ほかの事ほかの選択、外国の選択とか外国である選択をもいらんって感じがしますから、で、あの they prefer things that they fit their own choices of taste、だから、あー、自分の国であるものだけで、あの嬉しいんですよ。あー、外の、あー外のものはいらん。で、あとはもちろん high standard of living は、まあ、あの high standard of living もあるけど、そのなか、high standard of living の中にもいろんな問題があって、例えば社会の、日本社会の問題とか、their life is too systematic とか unreal とかがあって、so it's like a mixture, mixture 全部まぜて、it's like a, it's like a mixed すごいあの、あの、なんていうか深い、問題があるんですよ。It's country lost its own culture, it means like 普通の文化って、あー、日本はこの文化ですっていうと、みんなイメージあるんじゃないですか相撲である国とか、ある。でも、だけど、ま、それは、あのみんな日本、ま、外国の方が見えるけど、僕はまあ、2年3年ぐらい住んでいて、やっぱこの社会は日本の社会、なんか、その文化とやっぱ、日本国(くに)がもうぜんぜんあってないですよ。つなげてないから。こう、なんていう、あの、一番いい例は普通のあれ、船であれ anchor って、あるんじゃないですか、このあれ、あれロープあるんじゃないですか。そこに一回ペンとか誰か置いたら、すぐあのなんていう tangle lock じゃないですか。だから、一回 tangle したら、もう何回も lotate するから、こうもう止めないと、そう、もう何回も何回も、もっと深くなる。もっと難し問題くなる。So it's like a だから、その、culture があって、ま、こう culture が、ま、昔の culture ここですよ。もう。develop, develop してるんですよ、ずーっとでもま、。だけど、この、ま、国もこっち逆にあるきしてるんですけど、だけど、ま、あんまり perfect でつなげてないですよ。lock してないから。その、ま、lock は、ま、自分の、自分見つけないと、やっぱどどん船も、あの it's gonna sink みたいな。で、あの or shows little sign to be part

「時間的余裕」と「他者」の意義

of the global culture. だから、その、ま、それ問題、みんな日本人は、あ、僕はあの、ま、あの I' m very shy とか、I cannot mix with foreign power、それはもちろんわかりますよ。みんな日本人 they understand they have a problem。だけど、それは出せないですよ。それ、それを直すためにみんななんかしないんですよ。僕の友だちは、あ、ま、英語しらない、わかんない人、も、いますよ。And say, 僕、ま、ちょっと英語勉強したいねとか、もうちょっと B と遊びたいよねというメールとかがあるんですよ。で、僕は考えて、僕はあの考えたのは、難しけど、I know it' s difficult だけど、if you try 少しがんばったら you think about yourself やっぱり自分のが、まず最初は自分が変わらないと、何もできないという 僕があので伝えてほしいんですよ、あの、友だちに。だれかして、あ、じゃ、この人はあなたこの服を、もっとかっこいい服を着てとか、そういうじゃなくて、やっぱ basic 的に自分の考え方とか、ま、他の国のイメージとか、あ、どうやってともだちを作ったほうがいいとか、あー、なぜあの、この、世界、世界文化とかにどうやって参加できるとか、もっと強くあの position とかとれるとかみえない。

上の発話データを見てもわかるように、協力者には、自分が日本に対して持っているイメージに関連した、日本についての否定的観点や将来の希望を、具体的体験を交えつつたくさん話したいという気持ちがあるようで、英語混じりになりながらも止まらずに一気に語っている。前述のようにこのインタビューは全体に協力者が自由に語り、筆者は協力者がイメージをよりよく喚起できるように捕捉したり刺激を与えたりするだけで基本的には傾聴する姿勢を取っている。そのような状態で比較的早口で1時間も話し続けたということは、上級レベルの学生といえども注目に値するのではなからうか。そもそもの刺激となった読み物が全文引用して示したように非常に簡単な内容であったので、なおのことそれが強く感じられるのである。

約1時間のインタビューの最後にデンドログラム全体を統括するような名前をつけるよう求められ、協力者は “Illusion or hope” という名前をあげているが、当然のことながらこれはさきほどの「朝日」のイメージの延長線上にある考えである。

0367B : illusion, illusion. illusion は、ま、何か hope があって、there is some, there can be some, they can be progress Japanese people Japanese society can become big and yet sophisticated society and it can come on from its own culture and grow or blossom like a tree. あー、だけど今の状態では、but Japanese people are not that, uh, what should I say, uh, naive or あのー、なんていう bold, bold enough to take that one extra step to climb up the ladder. So they know something is there. They know it' s an illusion, but at the same time, they think there is something else there might be illusion, it might be something else. So what they can do is they can either stay in the same stairs and say o.k. that' s, that' s nothing there don' t worry, it' s just dark there みたいな。Or

「時間的余裕」と「他者」の意義

what they can do is, they can hope, and they can try step little bit more further, so when they go further for at some point of time, they get so close they will see something. And that is definite. That's what I think. あの何かあるって、絶対あるけど、今のころは、今の時代では it's an illusion. ま、将来に、あ、ほんと、maybe uh, it maybe a real thing it maybe practical thing, but as for now it's just an illusion, and one can only do is either think it's an illusion and forget it, or stay there hope, and you know, hope that someone does something miracle happens or you change yourself and then do good.

このような協力者の意見はどれも非常に興味深いのだが、「ブランド」という速読の読み物のどことつながって出てくる話なのかはよくわからない。全くそれを無視して何か自前の日本論を語った可能性を考えて、読み物とのつながりを尋ねたところ、本人としては確かにつながりがあることがわかり、読み手の個性がどれだけ色濃く反映されるのが読むという行為であるかを痛感させられることとなった。

協力者が当時履修していた上級のコースでこのような内容について話したり書いたりしているかどうか筆者は知らなかったが、少なくともそれまでにクラスの内外で交流のあった筆者にはこの協力者が日本についてこのようなことを考えていることやこのような経験をしてきていることを全く知らなかった。そこで本人にそのことを質問してみたところ、クラスでも話したことがなく、仕事柄日本とのつながりの深い父親や家族や友人などとも一切このような話はしたことがなかったという。インタビューの最後には協力者自身もこういった考えを自分が持っているということと、それを語ったということの双方に快い驚きを感じたということが語られた^{viii}。

日本語のクラスで教師やクラスメートとこのようなことを話したことがない理由について、協力者は「読むものがいっぱいあって」「話すチャンスがない」、「意見とか考えるチャンスはない」、「もう続けて、どんどんどんどん続けて（読んで）」「勉強のために、漢字のためにいいけど、やっぱりもっと discussion とか、何か知りたいときにはあまりいい方法じゃないと思います」と語っている。

4. 本調査のインタビュー・データがコース・デザインにもたらす視座

本調査のインタビュー・データから、以下の2点の気づきあげられよう。

まず、協力者の発話は非常に個人的な具体的な体験に基づくものが多いという点である。これは教師が実践の現場で直感的に感じてきていることであるが、テキストを読む際に、読み手がそれに関連した経験を過去にしている場合、それと関連づけて読解作業がなされているということがデータからも明らかになった。そしてそれに関連した、より重要な気づきとして、読み物と読み手の想起する経験との関連性は他者からはわかりにくい場合もあり、どのように読み物から喚起を受けるかは教師には事前になかなか想定しにくいことであるということが指摘できるだろう。

「時間的余裕」と「他者」の意義

次に、上述の点とも関連があるが、刺激となる読み物の単純さは（恐らくは複雑さも）読み手の中に喚起される思想の深さに必ずしも比例しないという点である。むしろ、それについて考える時間的な余裕や、学習者が思考を深めるのを支援する他者であったり問いであったりといった環境と、思考の深まりとの間に比例関係があるのではないかと推測される。前節であげた例の中では、当初「外国人」に対する日本人の態度として語られていたことが、インタビューが進む中で「外国人に対するものに限らず日本人に対する態度としてもある」というように協力者の意見が若干修正されたこともその好例であろう。また、インタビューが進むにつれて協力者の発話が長く、抽象度の高いものが多く混じるようになっていったこともそれに関係していると考えられる。今回 PAC 分析を実施した他の3人についても、似たような傾向が観察されていることから、聞き方にその一因があると考えられる。

日本語教育においても、文化・社会的アプローチ等の構成主義の考えが浸透するに連れて、「学び」のありようが学習者の置かれた環境との相互作用のうちに論じられるようになってきた（西口 2005、文野 2004 など）が、本調査のデータも読み物に向き合う読み手としての学習者が、与えられた時間や対峙する相手、そしてどのような方法の中で意見を表明することが求められたかという環境との関係性の中で自らの考えを深めたり表現したりしているということを示している。

では、それがコース・デザインにどのような視座をもたらすか。まず、学習者に与えられる予習シートなどの課題の与え方に再考が必要であろう。特に読解の場合、読み物の正確な内容の把握や、読み物の内容に対する賛否や直接関係のある意見の表明が求められるだけである傾向が強いと思われる。もちろんコースの目的がそこにある場合、それで問題がないわけであるが、読解に限らず、学習者が日頃体験していることを基にして様々な事象について考えを深めること、それを日本語で表現し他者と論じ合うことを積極的に推し進めたい場合、教師の予想する範囲を越えて議論が発展する可能性を常に念頭においてタスクの与え方やクラスでの議論の進行のし方に余裕を持たせるべきであろう。

また、後者のような狙いのコースを運営する場合、課題の分量などに留意して、思考を深めるのに十分な時間を与えることも重要である。今回のインタビューでは即興的に話したために英語になってしまったような発話も、時間があれば十分に日本語で議論することが可能であり、その意味でも時間的な余裕を確保することは大切である。

次に、思考を深めるためには時間的な余裕だけではなく、その学習者に向き合って接してくれる他者の存在が大きいことも忘れてはならない。他者に向けて語る中でイメージが膨らみ、思考が洗練されていくことが本稿のデータでもはっきりと見て取れた。教室で接する教師にそのような他者としての役割が求められると言える。教師が学習者の積極的かつ主体的な思考と発話を促す、よい他者として存在するためには、例えば異文化間コミュニケーションにおいて相手を十分に理解するための

コミュニケーション技法として渡辺（2002）が提唱している「エポケー（判断保留）」といった技術を習得することも有効であろう。しかし、それだけではなく、クラスメートやクラス外の人物・事物との接触をどのように活性化し、クラスに持ち込むよう設計するかという力量も教師には求められていると言える。

このような視点からコース・デザインを見直した場合、その結果としてクラスで扱える漢字や語彙、文法項目の量が減ってしまうと懸念する声も出てくる可能性がある。しかし、ICUのようにリベラル・アーツ教育の一環として言語教育を位置づける場合、狭義の意味での言語要素の習得はゴールではなく、様々な話題について読んだり議論したり論文を書いたりすることを通じて関心領域を広げ、与えられた情報などをクリティカル・シンキングによって検証し、自分自身の考えを持って対象に迫ることができるようになるというプロセスで必要なことがらに過ぎない。であるとすれば、それらの狭義の言語要素をたくさん身に付けても日本語によって対象と深く斬り結ぶことができないのでは本末転倒である。その上、現在のICUのカリキュラムでは上級日本語コースは技能別の複数のコースに分けられており、その性格上どうしても技能の向上に重きをおきがちで、各技能を越えて有機的なつながりの中で日本語を用いて思考を深めるといった活動を展開しにくい状況にあると推測される。狭義の言語要素の学習よりも、日本語を用いて思考を深め、理解・表現するという部分の学びのほうが他者の重要性が大きいことを考えても、個人授業ではなくクラスとして運営されるコースのデザインは、後者を強く意識して見直すべきであろう。

参考文献

- 小塩真司(2007)「心理データ解析A (ver. 3.0) 第 11 回(1) クラスタ分析(1)」
<<http://psy.isc.chubu.ac.jp/~oshiolab/index.html>> accessed at
15:38 on Nov. 5, 2007.
- 神寫敏弘 (2003) 「データマイニング分野のクラスタリング手法(1) - クラスタリングを使ってみよう! -」『人工知能学会誌』vol. 18, no. 1, pp. 59-65.
- 末田清子 (2001) 「留学体験の意味付け-大学生の留学前及び帰国後の滞在国に対するイメージ分析を通して-」、シーター・ジャパン『異文化間コミュニケーション』4、57-74.
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版.
- 内藤哲雄・金娟鏡 (2005) 「発達障害のある幼児をもつ韓国人母親の障害受容に関するPAC分析- 社会的支援体制と育児ネットワーク機能の視点から-」
信州大学『人文科学論集 人間情報科学編』39、11-25.
- 西口光一(2005)『文化と歴史の中の学習と学習者- 日本語教育における社会文化的

パースペクティブ』凡人社。

- 文野峯子 (2004) 『平成 13 年度～平成 15 年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 課題番号 13680365 研究成果報告書 日本語学習者と環境との相互作用に関する研究』
- 丸山千歌 (2007a) 「日本語学習者が日本語読解教材から受ける影響- 読解内容を知る上での PAC 分析法の有効性- 」横浜国立大学留学生センター『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』14、145-158.
- 丸山千歌 (2007b) 「日本語教材の文化トピックからの学習者の発想- 学習者とのインタラクションの解明に向けた PAC 分析の可能性- 」『日本語教育のフロンティア』くろしお出版、161-184.
- 丸山千歌・小澤伊久美 (2007) 「PAC 分析データを基に実践研究を考える- 読解教材を刺激とした留学生への質的調査から- 」『実践研究とは何か- 私にとっての実践研究 教育現場からの日本語教育実践研究フォーラム [予稿集] 日本語教育学会 2007 年度研究集会- 第 6 回- 【実践研究フォーラム】』日本語教育学会、141-144.
- 渡辺文夫 (2002) 『異文化と関わる心理学- グローバリゼーションの時代を生きるために- 』サイエンス社。

-
- i この学生は集中コースを履修しても合格できず、翌学期に週 10 時間のコースを履修することで当該レベルを終えるといった形で学習を進めてきており、通常の場合よりも時間をかけて日本語のコースを履修している。
- ii テキストの選定は筆者と共同研究者 (丸山千歌 横浜国立大学留学生センター) の 2 名で、日本語のレベル、内容、教材の普及度などの観点から行った。当該研究は、読解教材が学習者に与える影響を観察することが目的なので、観察しやすさを優先しステレオタイプ性の高い内容のものを採用した。
- iii 刺激文も、筆者と丸山との 2 名で検討した。
- iv 今回の調査では SPSS を使用した。
- v 2005 年 5 月 27 日異文化間教育学会プレセミナーでの講義 (講師: 井上孝代・末田清子・伊藤武彦) に基づく。
- vi その上、デンドログラムの図形のみを見てクラスターがいくつあるか判断する段階で、この協力者は図形を少し無視する形で隣り合っていない物同士をひとつのクラスターにまとめている。恐らく隣に示された連想語を読み、その内容に反応して取った行動だと思われる。筆者はその場で口頭で「言葉を読んで判断するのではなく、形を見て判断してほしい」と指示したが、それでも協力者がそのクラスター構成を変えることはなかった。PAC 分析においては、クラスターのまとまりの捉え方が調査実施者と協力者との間で別れた場合に、協力者自身の判断を優先することがよしとされていたため、当日のインタビューもそれに倣ったが、「第 1 回 P A C 分析と日本語教育研究会」(2007 年 10 月 20 日 於横浜国立大学留学生センター) における内藤哲雄先生の講演において、デンドログラムを無視してクラスター作成をさせてはならないことが指摘され、その意味でも PAC 分析にはなっていないことが判明した。
- vii 各発話に初話者を問わず連番になるよう番号を振ってある。A は調査実施者、B は協力者であることを示す。例えば「0001A」は、この録音データの冒頭の発話で、それは調査実施者の発話であることを示す。
- viii 録音終了後の私的会話において語られた。